

りある人なればたのもしとおぼすべし」(三澤抄) 遺一七〇六

鬪争堅固の警鐘は徒り歐洲大陸のみならず今や全世界の空に大に鳴つてゐる日本國民たる者は須く長夜の眠りから醒めねばならない、而して國體開顯の聖者吾祖日蓮大聖人の一大理想(法華經の理想也)である大教團組織の曉に當つて徹底的に一切人類をして妙法醍醐に等しく潤ははし常寂光土の思あらしめなければならぬ此れが吾々日蓮門下として聖誕七百年紀念事業の第一歩であり又吾々一生を通じての感應生活であり又報恩生活であるのである。

以上

### 善日鷹の使命

志村 皓 堂

貞應元年の二月十六日は善日鷹が誕生の日であつた。父の重忠と母の梅菊とが共に喜ぶそのなかにも、此の鷹が尊くも上行菩薩の御再誕として、

末法の暗を除いて、民族の文化を積極的に保護し新しい生命の道を照し出す、救ひの主であらうとは、よもや思はなかつたことであらう。當時に於て氣付かぬのは無理もない。冷暖を経ること七百、我が帝國は建國以來未曾有の文明を來たし、世界の悉くが羨みと怖れとを以て見るやうになつた今日、安房小湊の浦に生れました、善日鷹即ち日蓮聖人が如何なる使命のもとに、降誕あらせられたかと心付く人が、果して幾人あるであらうか？

一体世人の多くは、時に不出世の大偉人でも現はれると、之れに對して直ちに神秘的に解釋して了つて、何の爲めに偉いのか、何の爲きに尊いのか、而して何等の使命を齎したのであるかを考案もしないで、唯だ有り難いから信する、御利益があるから祈るといふのみで、此の偉人に對して何等研究的態度に出でないのか、大多數のやうに見受けられる。これが爲めに往々にして此の大偉人を過まり、飛んでもない曲解をしたり、あられない侮蔑的態度に出たり、または迷信に陥つた

りするのである。日蓮大聖人に對する上に於ても亦た其の通りで、鎌倉街頭に始められた四個の格言を聞いた人は、それが何の理由であるかを知らないで、日蓮といふ人は頗る喧嘩好きの人であるとか、また自らを高める爲めに徒らに他を罵詈するものであるとかと、一圖に思ひ込んでしまふ。

そうかと思へば、龍口法難に御首の切れなかつたと云ふのを聞いたものは、あれは佛の御再來だといふから、其の尊い御体に變りのないのは別に不思議はないと唯だ々々難有と思ふばかりで、他に何等考へも起さないのもある。また大聖人は上行菩薩の御再誕であられると聞いた人は、何故に昔し靈鷲山に於て、釋尊御說法のその時に、上行等の菩薩方が大地より涌現して、末法に法華經を弘宣せよとの佛勅を畏みて、二千年後の末法に特に此の日本帝國を撰んで、降誕あらせられての大々的弘宣であるかを知らないで、一介の漁夫重忠の子善日麿は、智慧が卓越して居られた爲め、妙法の勝れて居るのに氣が付いて、之れを弘められた

のが偶然佛勅を奉じたことになるので大方然か云ひ難すのだらう位ひに思つて、末法の初めの御出現が何等を意味し、そして我々に何ものを得せしめ給ふのであるかと云ふことを明らめやうともしないのである。斯んなことでは、恰ど折角大切に秘藏して置いた寶の玉が、何といふ名のもので、それが如何なる質で、そして何程の價値を有するものであるかを知らないで、唯だ寶ものだといひ誇つて珍重がると同じであつたり、また此の世にも稀な寶玉を、寶とも思はずに、偶々災難にでも遭ふと、斯ういふもの、ある其の爲めかもしれぬ、我が家を呪ふものであると云つて、之れを捨て、了うのと同じことではあるまいか。

廿世紀のお互ひが、世界的の大偉人日蓮聖人に對する態度を、こんなことでおくうちには、到底理想の國家社會を形成せしむることは不可能である一たび現社會に眼を放てば、身の毛のよだつ程恐ろしいではないか、思想は混亂して、社會主義デモクラシー、階級打破、勞働問題と物質的文明は

飽くまで精神的文化を阻害して、眞に恐るべき思想の墮落を來たさしめて居る、このまゝの推移に委し去つたならば、今後の世界は果して何んと成り行くであらう、釋尊は惡世末法時と云はれたが事實となつて現はる、のだから虚偽りは毛頭ない此の濁亂の世に一大光明を興へてやらう、墮落から救つてややうと叫んで居らるゝ慈悲の權化たる大聖人を顧みるものがない、これが先づ不思議である、目がわるいのか、耳に故障があるのか、誑かされて居るのか、それとも睡つて居るのであらうか、火が足許に移つて居るのに氣が付かないのだから暢氣千萬な譯である。於此乎吾々は善日磨即ち日蓮大聖人の使命の何たるかを、人が嫌たといふても無理にも聞いて貰はねば已まないのであるそれは焦眉の急であるからである。

里見氏は云はれた「吾等が最も正しく第三者を解したいと願ふ時、吾々は彼自身になつて見る必要がある、日蓮聖人を眞に理解しやうとするには日蓮聖人の「彼」の中へ吾々の「我」を入れて見

なればならない」と實に其の通りである、日蓮聖人の四百余篇の御遺文は、何ものを約語つて居らるゝか。吾々は先づ大聖人の「彼」の中に「我」を入れ込んで、最も眞摯に究め奉ることを忘れてはならぬ、大聖人に接し奉つて先づ耳朵に響くものは蓋し次の如きものひであらう。

「八萬の國にも超へたる大日本國」の一切も法華經化し終つて、根城を完全にして置いて、そして進んで世界の悉くに法華經を宣傳して、正しい教の杖に縋らして正しい道を歩まして、一人でも不平のないやうに、眞の平和を來らしめ、そして此の世界を擧げて寂光の都たらしめたいと云ふより外に何もものなからうと思ふ。東洋の大哲人たる大聖釋迦牟尼世尊によりて説き出された法華經を活かしたのが日蓮聖人である。

「此ノ壽量品ノ説顯ハレテハ則チ皆ナ我カ身ヲ見ルトテ一念三千ナリ今マ日蓮等ノ類南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ルモノ之レナリ」

と講せられてある如く、壽量品の御説法のその時

に、久遠の本佛が顯はれて、釋尊のみが佛であると思つたのが皆な我身々々のことであつた、我が身を措いて別に本佛を見出さうとしたことは迷ひであつた、一切の世人は悉く久遠の本佛であつて此の立派な人の住所が常寂光土である、世の一切のものは我が身の顯はれであるから、我が一擧手一投足は世の總てに及ぼすのである、事の一念三千の大法門を活かすのは此處である、我が身と他と没交渉のものでないとすれば、何として親疎や怨恨や不平やを懷かれよう、世の一切が佛であつてこそ我れも佛である、我が身が佛であつてこそ世の總てが佛なのである、此の一大圓佛の顯はれた時は、一會大衆歡喜身に遍滿して、大饒益を得たと記されてある。

處が此の寂光の土に住む本佛が、奸商であつたり、強盜であつたり、收賄者であつたり、また賣國奴であつたりするから面白い、此んな非行を敢てしなすは、  
のも衆生からめことた 丁度金にやうなブツへ小

石一つ投げ込んだとすれば其の波紋は岸まで擴がらねばやまないのと同じである、此の尊い本佛や立派な處をあたら臺なしにするのは、各自に一大自覺がないからである、此の「則皆見我身」の自覺あらしめんとして釋尊は立たれた、けれ共一寸も醒めない、滅後二千二百年に善日磨は生れまして、三十二才の御時に日蓮と銘打たれて千難萬苦三十年一日の如く叫ばれた、まだ醒めない、それから七百年の春秋を経た、けれ共世界はまだく醒める形勢はない、自繩自縛を繰り返へして、盛んに波立たして居る。

「一切衆生異ノ苦ヲ受クルハ悉ク是レ日蓮ノ若トナルベシ」

の聖語に感泣するものがあらうか？感泣しないまでも、せめて「日蓮」に觸れようとする人さへも乏しいのである觸れぬもの、醒められやう筈もなく醒めぬもの、感泣し感謝することの出來やうもな

こゝにブツノに解き着るべき真も手近なる真も眞單

な方法を知らないからであらう、今や世を擧げて此れに耳を傾ける必要がある、傾けずに居つては後悔する時があるであらう！

「萬民一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ラバ」

一大信念を起して妙法五字を唱ふる時茲に人は自覺に生き、世は義農の世となつて、眞の平和樂境を現出するのである。

善日曆の使命は實にこれなのである。(終)

## 改造の眞意義

小林 峰 月

現時萬邦の津々浦々に到るまで専ら改造を叫ぶざるものなし、然れども世人の唱ふる改造の言那邊を指せるや、甚だ其言の忙漠散漫にして其眞意義を解せざるは實に痛恨事といふべし。吾人をして言はしめば今時最も急務なるは先づ日本國民の心の改造なり。汝自らを知らずして徒らに改造を叫ぶは愚の甚しきといふべし、我國民は今や所謂危急存亡の秋に際するなり、徒ら

に五大強國の空名に酔ふ事勿れ、社會的改造も國際的改造も凡て個人の頭が其出發点なり。何ぞ階段なくして階上に達するを得んや、只附和的改造の叫びは寧ろ改造の意義を解せざる頑迷の代表者といはずして果何といふべき、よろしく雷同を廢せよ他を羨むなかれ、汝は汝の天職に生くべし、自己の天職に向て勇往邁進せと、額に汗して汝の生活を營め、遊惰放逸たる國民の改造は畢竟水泡空論に終るべきものにして天の福音に接するは難し、而して相互、自己の天職に進むならば其處に於て直ちに一致も調和も見出さるべし、國家社會に此一致調和を去りて國民の生活は不可能なり即ち例を以て言ふならば吾人の肉体は骨肉を以て構造せられ五管の働らきによりて始めて動作となる。若し足を切り去らんか歩行不可能なり、眼を取り去らんか判別不可見也即ち吾人の一致調和は五体具足の如き關係を有するものにして國民の相互扶助は其儘美はしき改造なり。かくするならば民力の涵